

# 県民図書室通信

発行一般財団法人神奈川県高校教育会館県民図書室 横浜市西区藤棚町 2-197

## 図書館と1年生のゼミをつなぐ

——学生が本に出会うきっかけとしての「生きた言葉」

井上慧真（大阪経済大学情報社会学部教員）

私の研究分野は主に教育社会学であるが、勤務先では1年生向けの一般教育科目を含め幅広く授業を担当してきた。その一つが1年生ゼミである。多くはアカデミックスキルの基本を育てることを目標とし、200名を超える大規模授業がある中で、10数名のゼミは「クラス」としての役割を期待される。

「ビブリオ・トーク」はその中で始めた試みである。構成例は示すが、最終的な構成は学生に委ねる。「バトル」ではなく「トーク」とするのは、チャンプ本を決めない年もあるためである。独自ルールとして、大学図書館か大阪府内の図書館に所蔵があることを条件とする。聴いた学生がすぐ借りられるようにするためである。漫画も可とし、条件外でも思い入れの強い本は相談のうえ認めている。

本を選ぶところから発表までは3~4回かけ、図書館に出かけ自由に書棚を見てまわる時間をとる。会話可能なスペースがあるので、グループで賑やかに進める学生や一人で集中する学生もいる。この過程は宿題にもできるが、授業内で確保する意義があると考えている。というのも、ガイダンスだけではなかなか本と出会えない学生がいると感じるからである。

この企画に先立って、例年司書の方にガイダンスをお願いし、分類番号やOPACの使い方を学び、一冊借りるまで行う。しかし授業後にそのまま返却して帰る学生も少なくない。荷物になるためかもしれないが、出会いが一瞬で終わるのは残念である。そこで授業内で十分に時間をかけ、「発表に使うのだから借りて持ち帰ろう」と思わせることを狙っている。自分の持っている本を紹介する学生は再読したり、友人の手伝いをしたりしている。

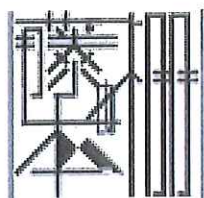
5年ほど続けているが取り上げられる本は不思議と重

ならない。『ひとにぎりの未来』（星新一、1980、新潮文庫）『マスカレード・ホテル』（東野圭吾、2011、集英社）『阪神園芸 甲子園の神整備—グラウンドの匠たち』（金沢健児、2023年、毎日新聞出版）『下町ロケット』（池井戸潤、2010、小学館）『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。』（汐見夏衛、2016年、スターツ出版）、『ハイキュー！！』（古館春一、全45巻、集英社）など、小説・実用書から漫画まで幅広い。

質問も多様で、「何ページですか」「映画とどちらがおすすめですか」「（注：実用書の場合）実際に試しましたか」などがある。小説好きに対して「小説を読めるようになるにはどうすればいいですか」と尋ねる学生もいる。「好きになったきっかけ」を問う質問も多い。映画やドラマを契機に読んだり、家族からの贈り物だったり、憧れの人物の著書であったりといったきっかけが多いようだ。

本を手取るきっかけを作る企画には多様な選択肢がある。そのなかで、この取り組みでは身近なゼミ仲間のお話を聞き、質問や応答を交わす「生きたやりとり」に価値があると考えている。「バトル」による競争でなくとも、人となりを知る経験や質疑の工夫を学ぶという目的は達成できるのではないかと。ただし反省もある。学生の紹介本は控えているが、質問や応答は記録しておらず忘れてしまう。教育図書館所蔵の克明な記録を見ると、「残す」ことの大切さと難しさを痛感する。記録を刊行物として残し、図書館が長期に保管するのは個々の教員の努力と制度的な仕組みがあってこそである。私自身、授業での試みを記録できていないことを反省しつつ、教育図書館の重要性を改めて実感している。

(いのうえ えま)



ふじだなの  
ほんだなから

Fujidaya Noh Heisaya

## 神高教奨学金問題プロジェクトの活動

### 1. 奨学金問題プロジェクトの立ち上げ

2013年7月発行の教育研究所ニュース「ねぞす」第74号に、中京大(当時)の大内裕和教授より「奨学金問題の深刻さと改善へ向けての活動」と題する寄稿を頂いた。家計所得減少、大学学費引き上げ、また、明けやらぬ就職氷河期を背景としながら、日本学生支援機構は、有利子枠のみを拡大し延滞金を課すなど状況が詳細に述べられている。

神高教は、その現状認識を受けて、同年8月の日教組定期大会討論において、給付型奨学金導入とともに、返済猶予期間上限、延滞金、有利子制度の撤廃を要求すべく、奨学金問題を日教組運動の重点課題とすることを訴えた。しかし、この時点では、奨学金問題の深刻さは可視化されるには至っておらず、日教組の取組も始まらなかった。

神高教は2013年11月教育研究所教育討論集会(『ねぞす』No.53掲載)でも「現行奨学金制度は支援になっているのか、教育の機会均等の内実を問う」をテーマとした、「貧困ビジネス」の様相さえ呈する日本学生支援機構奨学金への問題意識、また奨学金担当者の事務負担の過酷さに対する声からのとりくみである。そして、2014年5月241回中央委員会で奨学金問題プロジェクトの立ち上げを決定した。プロジェクトは、2014年度から2019年度の間、集中的に活動を行なった。

### 2. 奨学金問題リーフレットと二つのアンケート

プロジェクトは、2014年9月に、奨学金についての問題をまとめたリーフレット「ここが問題!日本学生支援機構奨学金!学校でできることは!?!」を作成した。事務負担の現状と返済困窮の声、学校でのとりくみ方をコンパクトにまとめ、10,000部を組合員、奨学金担当者、若手教職員、さらに、他の教職員組合、県教委にも配布した。

また、同年9~10月に、30歳以下の教職員を対象にした「奨学金に関するアンケート」を実施した(回答数479)。4割もの若手教職員が奨学金の返済を抱えており、総額の最多回答は300万から500万、中には900万以上という回答もあり、「大変苦しい」と感じていることが判明した。

同年10月には、「日本学生支援機構奨学金の事務作業についてのアンケート」を実施した(回答数72分会)。担当者は平均1人で78.5人(最多200人)を担当し、膨大な事務量、生徒・保護者への連絡の煩雑さ、個人情報扱うことのストレス等、94%の回答者が負担過重を感じていることが判明した。このデータは県教委との交渉にも反映され、2015年6月の教育改革交渉で、窓口を設け現状把握したいとの回答を得た。(県教委に設けられていた担当窓口が、育英会から日本学生支援機構に組織改編してより無くなり、学校が直接機構とやり取りし、責任の所在が奨学金担当者個人になりかねない状況となっていた。)

同年10月の日教組高校教育シンポジウム(レポート「奨学金問題へのとりくみ」)や11月の日教組全国代表者会議等で、奨学金問題について全国に発信するとともに、11月29日神高教第57次県教研集会において、特別分科会「ここが問題、奨学金!学校でできることは!?!」を開催し、アンケート結果をもとに組織内の議論を深めた。

### 3. 提言集

2015年10月26日、プロジェクトは、制度改善のための提言集「若者が苦しんでいます!奨学金問題、学ぶチャンスを下さい!」を作成した。文科省、大学等高等教育機関、企業、地方自治体、神奈川県教委、日本学生支援機構に対して、給付型奨学金制度の導入・拡充、教育費負担軽減、事務負担軽減を求める具体的な提言を盛り込んだ。約20,000部を、県立高校全教職員に配布するとともに、新聞等のメディアにも流し、国会議員、かな政連を中心とする県会・市会議員、日教組加盟単組、労組、市民グループ等へも政策提言を行った。

同年11月28日の神高教第58次県教研集会において、特別分科会「もっと話そう!奨学金のこと」を開催し、現役大学生や返済当事者である非常勤教職員の参加を得た。複数の支部教研も奨学金をテーマとし、組織内の議論が高まった。

2016年2月には、日教組第65次全国教研第20分科会「高等教育・進路保障と労働教育」にて、プロジェクトメンバーが、「神奈川県高等学校教職員組合奨学金問題プロジェクトのとりくみ」をレポートした。

#### 4. 運動の広がり

神高教の発信から運動は広がりを見せた。ようやく日教組はとりくみを始動し労働者福祉中央協議会が中心的な役割を担った。2015年10月2日、中央労福協は、「若者の雇用と奨学金」の問題に焦点を充てたとりくみのキックオフ集会を開催し、プロジェクトメンバーが登壇した。中央労福協は、給付型奨学金の導入と無理のない返済制度を求める全国署名を提起し、2016年3月22日に政府に310万筆を超える署名を提出した。その後の参議院会館院内集会では、返済当事者でもあるプロジェクトメンバーが報告を行い、自民党を除く各政党代表が奨学金制度の改善を訴えた。2017年2月28日には、奨学金問題対策全国会議との共催で衆議院会館での院内集会を催し、プロジェクトメンバーが登壇して、返済リスクに関わる生徒保護者の現状を訴えた。県内では、神高教も、2015年10月24日にスタートアップ集会を実施、職場署名運動を開始した。12月6日に街頭署名行動も行い、合わせて10,000筆を集めた。



2016年3月には、日教組も「奨学金制度の改善を求める3.5集会」を開催し、神高教のとりくみを報告した。集会後、「奨学金制度の改善を求める街頭行動」を実施した。このようなとりくみによって世論が形成され、7月参院選から奨学金問題は与野党の選挙公約に盛り込まれるようになった。11月、プロジェクトは、三者面談等で利用できる奨学金問題パンフレット「子どもと一緒に考えるための奨学金ガイド」を作成配布した。また、2017年1月22日、高校教育会館は、県教委の後援、県労福協との共催で、「奨学金についてとことん話し合うシンポジウム」を開催した。パネリストとして、県高P連、県校長会、県立高校卒業の学生が参加し、「オール神奈川」で奨学金問題にとりくんだ。

#### 5. 給付型奨学金と大学等授業料減免

2017年3月31日、給付型奨学金についての法案が衆参両院で可決・成立した。

その後も、プロジェクトメンバーは、7月24日の連合主催「奨学金制度の拡充を求めるシンポジウム」、2018年4月28日の日本弁護士連合会主催シンポジウム「子育てにまつわるお金のこと～子育て分野の社会保障を考える～」、同年10月11日の神奈川人権研究交流集会分科会「子どもの貧困・教育格差の現状と私たちができること」などに登壇をした。

2019年5月10日、参議院で「大学等における就学の支援に関する法律案」が可決・成立し、低所得者世帯を対象に授業料減免と給付型奨学金が拡充されることとなった。

2025年現在、給付型奨学金は、中間所得層（世帯収入600万円程度）まで拡大し、貸与型奨学金返済に関しては、保証人が廃され（保証料徴収）、企業による返済直接送金の制度が導入されている。また、多子世帯（扶養3人以上）については授業料が無償化されている。事務負担も、マイナンバー使用やデジタル化によって業務軽減が図られている。しかし、「奨学金」と呼ぶにはまだほど遠く、さらなるとりくみが必要である。

(資料委員会 久世公孝)

太字は県民図書室所蔵資料です。

共同時空 <https://kyodojiku.wordpress.com>

検索

### 和字青案内

■『「新しい生徒会」の教科書 学校を変え、社会を変えるためのヒント』高橋亮平・西野偉彦・猪股大輝・一般社団法人生徒会活動支援協会著 旬報社 2025

国内の生徒会活動の優良事例を紹介し、海外の先進事例にも目を向けながら、主権者教育や若者政策の観点から、これからの時代に求められる「新しい生徒会」の姿を提唱している。

■『学力喪失 認知科学による回復への道筋』今井むつみ著 岩波書店 2024

子どもたちが本来持っている「学ぶ力」を学校で十分に発揮できないのはなぜなのか。その原因と回復への道筋を認知科学の視点から解き明かし、生成AIの時代の子どもの学びと教育のあり様にも言及。(4面に続く)

借りなくてもいい、読まなくてもいい

原 由花

すみません、ここで勉強してもいいですか？

遠慮がちにそう尋ねてきた生徒に、小さな引っかけを感じました。学校司書になって1年目のことです。当時は新型コロナウイルスによる様々な制限が尾を引いており、校内での過ごし方が細かく決められていたことも一因かもしれません。

次の年からは、新入生に向けた図書館オリエンテーションで「図書館は自由に過ごしていい、本を借りなくてもいい」と、とにかくアピールしました。ソファでゆっくりしている人も、カードゲームを持ち込んでいる人も、そう話すと生徒たちの興味がこちらに向くのが感じられます。

他の学校図書館の実践にも後押しされ、図書館に本以外の要素を少しずつ増やしていきました。文房具やぬいぐるみを置いてみたり、BGM を流してみたり、ボードゲームも導入しました。

仕掛けが功を奏したのかはわかりませんが、本は借りずとも毎日足を運んでくれる生徒が現れました。友だちを呼んできて課題をしたり、お喋りしたりして過ごしています。その様子を見た他の生徒が待ち合わせ場所として立ち寄るようになり、あちこちから楽しげ

な声が聞こえてくる図書館に変わっていきました。

そんなある日、もうすっかり顔なじみとなった生徒から、課題でゴルフについて調べているが本はあるかと聞かれました。毎日来ていても本を借りる姿はほとんど見たことがなかったため、その言葉に驚きと共に嬉しく思いました。普段から図書館という空間に親しんでいたからこそ、本で調べてみようと思ってくれたのでしょう。このエピソードは、1年生から図書館に通っていた生徒が3年生になってからのことです。読んでいる皆さまは“ようやくか”と感じられるでしょうか。私は高校の学校図書館を入口として、将来出会う図書館を活用できるようになってほしいと考えています。そのためこちらとしては、“まさかこんなにも早く”といった心持ちなのです。

大半が進学を選ぶ本校では、多くの生徒が卒業後図書館に接する機会を持つはずです。そのときに図書館は誰にでも開かれているということ、困ったときは司書がいることを思い出してもらえるよう、“まずは来てもらうところから”をモットーにこれからも励んでいきたいです。

(はらゆうか、霧が丘高等学校)

## 和行書案内

3面より続く

■『教師の「やりがい」とは何か キーワードで見える教育の理想と現実』手島純編著 天野一哉・井上恭宏 金澤信之・原えりか著 小鳥遊書房 2025

「教員不足」「ブラック」などマイナスイメージで語られることが多い教育の現場。「教師」「学校現場」「教科指導」「生徒指導と生徒指導提要」「人権・同和教育」「外国につながる生徒」「インクルーシブ教育」「ジェンダー」「性的マイノリティ(LGBT)」「子どもの貧困」「高校中退」「キャリア支援」「特別指導」「定時制高校」「コミュニケーション」「リテラシー」などのキーワードから教職の意義を再確認し、そのやりがい・魅力を伝えている。現場の教職員はもちろん、「教職」・「教育」に関心を持っている人にも読んでもらいたい1冊。

## 雑誌紹介

『女も男も一自立・平等』No.145

2025年春・夏号 労働教育センター

今号のテーマは「生理について話そう」。Part1には、「生理休暇のいま、これから」、Part2は、「生理の授業とジェンダー」、Part3は「『生理』から見える日本

社会の課題」。BOOK GUIDE は大谷恭子著 柳原由以 黒岩海映編『分離はやっぱり差別だよ。人権としてのインクルーシブ教育』(現代書館 2025)を竹村雅夫さんが紹介。「共に生きる教育」のために奮闘した大谷恭子弁護士の遺言ともいうべきメッセージ。



神奈川県高等学校教育会館  
県民図書室  
kenmin tosyosho

『共同時空』第114号(2025年9月発行) 発行:神奈川県高等学校教育会館県民図書室  
発行人:馬鳥 敦 編集:樋浦敬子 印刷:神奈川県高等学校教育会館  
(『共同時空』の最新号、バックナンバーはウェブでも閲覧可能です。https://kyodojiku.wordpress.com/)